

むことに主に関心を抱いている。倫理的タイプは、巡礼を、本質的に、スタミナと自制心を試すものと見ている。彼（あるいは彼女）は、何が正しい巡礼の行動かということに関して厳密な考えを持っていて（たとえば、ホテルには泊まらない）、巡礼路では、他者と大いに競い合う。本当の巡礼は宗教的な巡礼なのだ。ケリケゴール的な意味で宗教的な。中略。要は、合理的な衝動なしに信じることを選ぶのだ—空無の中に飛び込み、その過程で、自分自身を選ぶのだ。」（ロッジ，1995 pp. 421-422）

巡礼とは、「自己認識の実存的行為」という作者の言葉があるが、巡礼そのものが自己過程である。だから、自己を楽しませる手段としての巡礼、他者と競争し、優位に立つ、こうあるべきで巡礼をしている、という意識からも無縁である。まさに巡礼をするだけ、自分を理解するために、その目的だけのために巡礼をする、その意味こそが、実存的ではないか？

次に、社会心理学の主要な理論で巡礼行動を説明すればどのようになるだろうか。

学習理論は別名強化理論とも呼ばれ、人間の社会行動を報酬と損失（コスト）で説明しようとする。報酬を最大に、損失を最少に、あるいは報酬量から損失量を引いた成果がプラスになるように人間は行動するという考えである。一見すると、明らかに学習理論は分が悪いように思える。巡礼から得られる報酬、カトリック教徒にとっては、免罪と祝福、それ以外の宗派、無神論者にとっては、巡礼中に感じる、自己満足感、充実感であろう。巡礼に必要な費用や時間、歩く労力はコストと考えられる。ただ何を報酬、コストにするかは、個人差があってなかなか難しい。

認知理論では、巡礼行動に対してどのような態度、信念、認知を抱いているかによって説明ができる。巡礼行動に対して好意的な感情を抱き、重要他者も自分が巡礼を行うことを期待しており、宗教的な教えからも、是非巡礼をすべきである、という信念を抱いていると推測される。巡礼という特定の態度対象から派生してくるというよりは、その個人が抱いている一般的な宗教的態度や価値観から生じてくるものであろう。

役割理論は、所属集団や集団における地位や役

割で社会行動を説明する。自分はキリスト教徒、カトリック教徒という集団の一員であり、その役割を遂行するために巡礼に行く。一連の祝福と免罪を求めて巡礼を行うのである。

残りの主要理論は場理論である。この理論は、巡礼行動という個人的な行動を説明するにはあまり役立たない。もちろん、場を社会的、文化的、歴史的な文脈という幅広い解釈すれば別だが、レビンの指摘しているような、小集団文脈での場の誘発性といった、概念での説明には馴染まないように思われる。

社会心理学の主要な理論の中には位置づけ難いが、精神分析学的な理論の魅力も捨て難い。無意識の自我内の葛藤解決のために、巡礼者自身は意識していないが、巡礼に出かけるかもしれない。あるいは、無意識の罪や原罪からの解放、日常生活からの逃避行動、魂の昇華のために、一種の適応機制として巡礼行動を採用することも考えられる。

また人間には本来的に移動したい、動きたいという欲求があるのではないか。本能として動くことが刷り込められているのかもしれない。人間にとって一番過酷なことは、狭い空間の中に閉じ込められることである。刑務所の独房、あるいはその部屋の中で縛られた状態を想像してみるとよいのではないか。死刑以外の極刑は、おそらく動くことの自由を剝奪されることである。

閑話休題、ここで話題が突然変わる。

「リバティバランスを撃った男 (The Man Who Shot Liberty Valance)」というアメリカ映画の中で、ジョン・ウエインはジェームス・スチュアートに言った。「You're a persistent cuss, pilgrim. お前は永遠のやっかいもの、巡礼者だ」アメリカ映画には、ロード・ムービー (road movie) という伝統がある。かつての西部劇映画がその代表である。西へ西へと向かう幌馬車隊、駅馬車、牛を移動させるカーボーイ、流離いのガンマン等を主題にして多くの映画が作られた。種々の理由で西部劇は製作されなくなったが、アメリカの広大な大地を車やバイクで彷徨する映画が相変わらず人気を博している。ニューシネマでは（とは言っても、今ではオールド・シネマになってしまったが）「イージー・ライダー」、「俺たちに明日